

竹内和義（海城中学・高等学校）

## I. はじめに

平成5年度、中学における英語教育はオーラルコミュニケーション元年と位置づけられた。これは文部省の新指導要領によるものであり、これに伴って教科書も新しいものが導入された。そうした中でコミュニケーション能力の育成という目標を達成するためには、どのように中学の英語教育を展開してゆくべきか。本稿ではその理論の歴史の変遷を概観した後、実際の授業について一つの試みを提示してみたい。なお、本稿は1993年10月に行われた年次大会での研究発表をまとめたものである。

## II. 外国語教育の歴史的潮流

外国語教育の始まりは、16世紀から18世紀にかけてイギリスで行われたラテン語教育に溯る。ここで生まれたものは今日でも馴染み深い訳読文法式（The Grammar-Translation Method）である。Richard and Rodgers（1986）が説明するように、その特徴は1)文法規則の機械的暗記、2)語の屈折・結合、3)母語への訳出、4)例文を書く練習（時として訳つきのテキストとダイアログを平行使用）などであり、古典言語であるラテン語の解読のために生まれた方法である。これは学習者に対して必要以上の文法項目と語彙を暗記させ完璧な訳を求めるものであった。それにもかかわらず訳読文法式は、19世紀において外国語習得の主要な手法であった。

20世紀になると言語獲得理論は心理学の影響を受けることになる。その先駆となったのがB. F. Skinnerの“Verbal Behavior”(1957)であった。彼の主張によると、人間の行動は刺激と反復によって強化され、無意識の中に規定されていくものだという。その上で、言語とは自動的な条件づけを通して人間が獲得する極めて複雑な反応体系であると定義した。更に、言語様式は、強化されるものと、そうでないものがあり、強化されるものだけが定着するという「オペラント条件づけ」を唱えた。

このSkinnerの行動主義心理学と結び付いたのがSaussureやBloomfieldを代表とする構造主義言語学であり、その結果C. C. FriesによりThe Audiolingual Methodが誕生した。その基本理念は、反復練習を音素、形態素、統語構造について行うというものであった。これは言語構造の基本的認識である対立の原理と正確さの原理を生かしたものである。具体的には、1)型の模倣、2)暗記、3)対立を利用した反復練習（置き換え、拡大、変形等）、4)現実の発話に近い表現の選択・応用であり、こうした流れを経て適切な構造が自動的に表出されるレベルにまで達するというものである。この心理学と言語学の理論に裏打ちされた外国語教授法は、1960年代一世を風靡し、現在も様々な形で取り入れられている。

このSkinnerの言語獲得理論にいち早く異議を唱えたのがNoam Chomskyであった。チョムスキーは刺激と反応の心理学（S-R psychology）では言語行動は説明不可能で、母国語話者の発話は常に新たに創造されると考える。更に、文は模倣や繰り返しによるのではなく、人間に生得的に備わった「言語能力（competence）」によって「生成」されると主張

する。チョムスキーはこれを生成変形文法理論として体系化し、認知心理学と結びつけることにより Audiolingualismを完全に否定してしまう。しかし、外国語教育においては、彼の理論に基づく具体的な方法論はついに示されずに終わってしまった。

### Ⅲ. 最新の第2言語獲得理論

#### A. Communicative Language Teaching (CLT)

Audiolingualism がアメリカで否定されるとイギリスでも新なる外国語教育法の模索が始まった。外国語習得は単なる構文をマスターすることではなく、コミュニケーション能力の習得に焦点を当てるべきであるという動きがそれである。Wilkins の Notional Syllabus(1976), Widdowsonの Teaching Language as Communication(1978), Canale & Swain の "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing"等の著書・論文にその考え方は代表されている。その特徴を挙げてみると、1)言語とは意味を表すための体系である。2)言語の基本的機能とは相互作用と意思伝達である。3)言語構造はその機能と意思の伝達を映し出すものである。4)言語の基本的な単位は、単にその文法的、構造的特性ではなく、談話の中に表される機能的意味や意思伝達の区分である(Richards & Rodgers, 1986, p.71)。そして、これらの特徴を踏まえて外国語の授業は行われるべきであるとしている。

Canale & Swain (1980)は、コミュニケーション能力(communicative competence)には、1) grammatical competence 2) sociolinguistic competence 3) discourse competence 4) strategic competence の4つの側面があるとしている。 grammatical competence とは、Chomsky(1965)が定義したlinguistic competenceとほぼ同じものと思われる。つまり、文法や語彙能力のことで、従来この能力のみの習得を目指し外国語教授は行われてきた。sociolinguistic competenceとは、コミュニケーションが行われる社会的環境を理解する能力のことで、人間関係、共有された情報、コミュニケーションの目的等がそこには含まれる。discourse competenceとは、個々のメッセージをそれぞれのつながりの中で解釈する能力、及び意味が談話や文脈全体とのかかわりの中でどう表されているかを解釈する能力のことである。そしてstrategic competenceとは、コミュニケーションを開始し、維持し、修正し、方向転換するのに使う方策のことである。これらの4側面の養成こそ外国語教授に求められているものであるとする。

Brown (1987)は、コミュニケーション能力を養うため、教室での実際の授業に次の4つを考慮すべきだとする。それは、1)communicative competenceの全ての側面に焦点を合わせるべきでgrammatical competenceのみに限るべきではない。2)formだけを教えることが授業を組み立てる上での主要な骨組みになるのではなく、functionを骨組みとして、それを通じて form を教える。3)正確さは、メッセージを伝えることの次に来るものである。流暢さが正確さより重視されるべきであり、コミュニケーションを成功させるための最終的な基準は意図された意味が実際伝わるかどうかである。4)生徒達が最終的にリハーサルされていない状況で目標言語を発信・受信の両方において使いこなせなければならない(p.213)とする。CLTの登場以来、単なる文法の学習やオオム返しの英語の授業が変化していき、コミュニケーション能力の育成を図ることが真剣に議論され始めてきている。

#### B. Krashen's Theory

もう一つ現在の外国語教授法に影響を与えているものにStephen Krashenの理論がある。

彼の考えは、授業時間はなるべく“natural acquisition”が可能な状況をつくり出すよう設定し、学習者がコミュニケーションを目的とした言語活動を行うべきであるというものである。その理論の中でKrashenは以下に挙げるように5つの仮説を提示した。

#### Five Hypotheses

##### 1. The Acquisition-Learning Distinction

大人は、第2言語能力開発のための2つの明確でそれぞれ独立した方法を備える。一つは acquisitionで、これは子供が母国語能力を開発するのと似通った潜在意識下の過程のことである。もう一つは learningで、これは第2言語の文法規則を意識的に習得し、それを運用することである。そして、意識して習得(learn)したことは、獲得(acquire)したシステムに入り込むことはできない。

##### 2. The Natural Order Hypothesis

文法構造の獲得は、予測可能な順序に従って行われる。

##### 3. The Monitor Hypothesis

第2言語でコミュニケーションをする際、発話を司どり、かつ流暢さをもたらすのは獲得(acquire)した言語体系のみである。意識して習得(learn)したものは発話のチェックやモニターをするに過ぎない。更に、このモニターは、時間的余裕があり、発話者が文法に詳しいという条件が揃わなければならない。

##### 4. The Input Hypothesis

現在の言語能力よりもわずかに上回ったインプット ( $i+1$ ) を理解する(comprehensive input)ことにより、最もスムーズに言語が獲得できる。その時には、文脈、知識、非言語的要素が理解を助け、自然と流暢な話し方が現れてくる。また、コミュニケーションがうまく行けば  $i+1$  は自動的に与えられているので、そこはあまり考慮する必要はない。

##### 5. The Affective Filter Hypothesis

学習者の情緒 (emotional state or attitudes) がインプットされる度合いに影響を及ぼすので、Affective filterが低いことが望ましい。具体的には、motivation が高く、self-confidence があり、anxiety が低い状態を言う。

Krashenのこの5つの仮説は様々な形で議論を呼んだ。例えば、McLaughlin (1978)は、モニターを使う最適なレベルがあることを認めている一方で、意識して習得した文法知識は役に立たないということの矛盾を指摘している。その他、初期段階でモニターを使い過ぎると流暢さや自然な表現の育成に障害をもたらすという点、acquisition/learningの定義や線引き、更に、理解を伴った inputが speechを “emerge” させるという点に疑問を表している。またLittlewood (1992)は、意識した習得は自然習得を強化するとし、Krashenとは逆の立場をとっている(p. 67)。

以上の理論的側面を踏まえ、具体的に授業の中でどう理論を生かしていけばよいのか見てみたい。

#### IV. 授業方針

平成元年度に出された中学校新学習指導要領に基き、教科書出版社の編集基本方針及び特色が次のようになった。1) コミュニケーションの重視 (従来の教科書との違い)、2) 異文化相互理解の重視、3) 豊かな心を育てる豊富な題材の3つである。こうした方針に則ってできあがってきた教科書は、音声の重視、豊富な listening exercises、挿絵や写真の

多用、現実的な場面設定による会話形式といった特色を持つものとなった。

筆者の勤務校である海城中学校においては“SUNSHINE ENGLISH COURSE”（開隆堂）を使用しており、その特徴は以下のようにまとめられている。

#### 1. 編集の基本方針

- a. コミュニケーションを中心とした、生徒と共に創る手作りの教科書
- b. 人間愛を基盤にしたことばと文化のつながりを重視した教科書
- c. 世界にはばたく地球市民の育成をめざした教科書

#### 2. 特徴

- a. 本文の印刷がされていない Listening 重視のセクション  
(内容を把握する手掛かりになる絵や重要表現のみの印刷)
- b. 各学年3つのパートに分け、それぞれ1つのテーマでくくっている  
1年「ことばと世界」 2年「よりよい環境」 3年「さまざまな人々」
- c. 使用頻度が高い言語材料を早く出し、その後スパイラルに扱う  
(1年に過去形、2年に現在完了〔継続・経験〕、3年に受動態が移る)
- d. 新しい文、文型、文法事項は (1)そのセクションでの練習→(2)課末での練習→(3)パート末のまとめと練習、という3段階方式で理解から定着まで考慮

(「英語教育」1993年2月増刊号)

海城中学校における英語は、3学年の教科書を中2までに終了する。副教材として(1)教科書準拠リスニングテープ、(2) BEST FRIEND (復習・宿題用ワークブック)、(3)ステップワーク (復習・宿題用ワークブック)、(4)新中学問題集 (発展学習・宿題用) が与えられる。又、授業時間数は日本人教師による授業が週5時間、外国人講師による授業が週1時間である。そして目標を以下の点に置いている。(1) 社会の中で実際に役立つ英語力の養成(コミュニケーション能力の育成)、(2) 受験にも対応できる英語力の養成。こうしたことから生徒には次のようなことを求めている。(1) 復習重視の学習、(2) テープを中心とした学習、(3) 宿題、小テストを確実にこなす、(4) NHK「基礎英語」を毎日必ず聞く(5) 1年次3学期に英検4級、2年次2学期に3級、3年次2学期に2級合格。

授業を進めるうえでまず力点としているのは、interaction のある授業、つまり実際のコミュニケーションに結びつく授業である。次に、力を入れているのはreceptive skills (listening and reading)であり、特に listeningを中心として進められている。これは、Natural ApproachやTotal Physical Responseに代表されるComprehension-based Approachや、Krashen の提起した方法を踏襲している。つまり、理解を伴うインプットが文法や語彙の獲得に一義的な役割を果たし、インプットを浴びることによって言語が自然にアウトプットするという方法である。Audiolingualism の立場から本文等の暗記はさせていないことも付け加えておきたい。これはrote-memorization に終わり、かける時間の割りに効果が余り期待できない。

#### V. 授業実践

教室における言語活動が、実際のコミュニケーションに結びつくにはどのような授業が可能であろうか。その試みをここで示してみたい。

##### 1. Target Sentences (新出文法事項の導入)

- a. 絵などを使って教師が新出構文をデモンストレーションしてみせる。

例) 現在進行形

Teacher: Look at the picture No.1, everyone. Jim is playing tennis.

- b. 疑問文にして、続けて答え提示する。

Teacher: Is Jim playing soccer? - No, he isn't. He's playing tennis.

- c. 絵を見せて、一人の生徒に質問をする。

Teacher: Taro, look at the picture No.2. Is Kumi playing tennis?

Taro: No, she isn't.

Teacher: What is she doing, then?

Taro: She's studying English.

- d. 一人の生徒が別の生徒に質問。

Taro: Makoto, look at the picture No.3. Is Tom skiing?

Makoto: No, he isn't.

Taro: What is he doing, then?

Makoto: He's skating.

- e. 絵とは別に、身近かな事柄を題材にする(文法より意味を伝えることを意識させる)。

Teacher: Look at Ken. He's smiling.

- f. 教科書準拠テープで教科書にある target sentences を聞き理解 - 意味を言わせる。

2. 新出語句の導入

- a. テープによるリスニング。
- b. 個々の語句の発音方法を説明。
- c. テープの後から繰り返し声を出し練習。
- d. 教科書を開き、文字を見ながらもう一度テープの後を繰り返し発音練習。
- e. 個々の語句の意味を日本語で確認。

3. 新しい課の場面(背景)説明

4. 本文の内容理解

- a. 本文をテープで聞かせた後に、内容に関する英問英答をする(2~3度繰り返す)。
- b. 再び教科書を見ないで、3回テープを聞かせる。
  - (1) その際、頭の中でのイメージづくりを促す。Omaggio(1986)は、仮定等によって生じたあいまいさを解決する作業こそがリスニングとリーディングであると、論じている (p.123)。
  - (2) 概略をつかませる。
  - (3) Note-taking を指導する。
- c. 聞いた内容の概略を日本語で言わせる(通訳)
- d. 1文ずつ意味を確認しながら、テープの後についてリピートさせる。その際、文中における個々の音の音質変化・同化・リダクションなどの音声的变化を説明し練習させる。
- e. 教科書を開いて今度は文字を見ながらもう1度リピート練習させる。
- f. 意味の確認と文法事項を簡潔に説明する(日本語訳にこだわらず簡潔に)。

5. 音読

- a. 教科書を閉じて1文1文テープをよく聞き、リピート練習する。

b. 流れてくるテープの音と同時に自分の声を重ねるようにリピート（シャドーイング）  
練習 → fluency につなげる。

6. BEST FRIEND（ワークブック）

- a. 文法事項の確認、練習
- b. 「書くこと」の練習

7. 小テスト

- a. 教科書本文のディクテーション
- b. ワークブックを中心に文法・ライティング力の確認

VI. おわりに

コミュニケーションを中心とする授業は、文部省がいくら教科書の内容をかえたり、掲げる目標をかえても現場の教師が相変わらず訳読文法を中心とする授業を展開していたのでは実現されない。教師自身が自己研修していく中で、英語というものに対する認識を改めることが先決である。自らも英語をコミュニケーションの手段として学び、理論を踏まえて生徒達の要求に答える授業をしていく。その上で社会の中で求められる英語力を身につけられるような指導を行うべきであろう。

参考文献

- Brown, H. D. (1987). Principles of language learning and teaching. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. Applied Linguistics 1(1): 1-47.
- Chomsky, N. (1965). Aspects of the theory of syntax. Cambridge, MA: MIT Press.
- Krashen, S. (1982). Principles and practices in second language acquisition. Oxford: Pergamon.
- Littlewood, W. (1992). Teaching oral communication. Oxford: Brasill Blackwell.
- McLaughlin, B. (1978). "The monitor model: some methodological consideration." Language Learning. 28(2): 309-32.
- Omaggio, A. C. (1986). Teaching language in context: proficiency-oriented instruction. Boston, M. A.: Heinle & Heinle.
- 大竹肇 (1993) 「中学でのコミュニケーション能力育成と教科書」『英語教育2月増刊号』26-27. 東京: 大修館書店
- Paulston, C. B. (1992). Linguistic and communicative competence. Clevedon: Multilingual Matters.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (1986). Approaches and methods in language teaching: a description and analysis. Cambridge: Cambridge UP.
- 杉本義美 (1993) 「積極的にコミュニケーションをはかるための戦略的能力の育成—Listening and speaking for communication の指導を中心に—」『Step Bulletin』65-84. 東京: 観日本英語検定協会
- Widdowson, H. G. (1978). Teaching language as communication. Oxford UP.
- Wilkins, D. A. (1976). Notional syllabuses. Oxford UP.